

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 **小羊学園**

〒431-1304

静岡県浜松市細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohituji@imix.or.jp

H.P http://www.imix.or.jp/kohituji/

発行人：稲松義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2007年2月20日

第 290 号

山浦明子先生

天に召される

理事長 稲松義人

三月九日の早朝でした。その日私は編集が遅れていたこのつのはえをその日一番に印刷に出す予定でした。私の携帯電話に浜松十字の園の平井園長から連絡が入ったのは、後で確認すると六時四二分でした。十字の園の明子先生の部屋に駆けつけると、まだ体温の感じられるおからだがいっもの様にベッドにありました。六時三〇分に検温をしてくださった職員が気付かぬくらいお静かに眠っておられたのでしよう。この前後、どの時点で呼吸が停止されたのかははっきりしないのですが、きっと明子先生は、ご自分でよいときに、安らかに天に召されていかれたのだと思います。

昨年初、明子先生は、転倒されたことからベッドでの生活が多くなっておられました。骨折はなかったのですが、体の痛みもあり朝の礼拝にも出て来られなくなっておられました。それでも少しずつ回復されてきていると感じておりましたが、初冬に体に麻痺が見られるようになり、医師の診断では脳梗塞とのことでした。その日のご本人の体調によって表情は違い、苦しうにご病氣と闘っておられるような日もあ

りました。が、お部屋をお訪ねすると話に耳を傾けてくださり、時には短い言葉を返してくださいるまでに、ひところは回復しておられました。

しかし、長くなるベッドでの生活で徐々に体力も衰えていかれたのでしよう。今年になって、点滴による栄養になり、医師からはこれからは一日一日が明子先生の頑張り次第だというようなお話でした。

私自身は忙しさにかまけて思うほどお訪ねできなかったことを申し訳なく思います。が、十字の園の職員でもある山浦俊治先生の姪にあたる村井さん、小羊学園からは渡辺禎子施設長が毎日のようにお部屋を訪ね、色々と気配りをしてくださいました。

午前十時過ぎ、故人の所属しておられる日本基督教団遠州教会の小林眞牧師も駆けつけてくださり、午後三時から小羊学園でお別れ会をし、翌一〇日の正午より、遠州教会で葬儀をしていただくことになりました。

小羊学園でのお別れ会も、教会での葬儀でも遠くから近くから、大勢の皆さんがお集まりくださいました。火葬を終え、穏やかな春の陽ざしの中で、その日のうちに遠州教会の納骨堂に納骨されました。今は十二年前に亡くなられた故山浦俊治先生と並んで静かに永遠の眠りについておられます。

先頃、明子先生を見舞うために三年ぶりに帰国された姪にあたるペイトン

朝子さんも、葬儀のために再び浜松に来てくださいました。数日後にはオランダへ帰ることになっており、一緒に天国に送ることができたのは不思議な神さまの導きだとおっしゃいました。小林牧師も翌日からはお仕事でインドに行かれるご予定だったとのことでした。明子先生はすべてのことをご存知だったかのように、時を見て天に帰られたのでは、と思われたのでした。

一二年前に山浦俊治先生をお送りしたときは、突然のことであり、現役の理事長でしたので、小羊学園ではその後のことについて大きく動揺しました。明子先生の場合、現役を引かれてからしばらく療養の日を送られてからの逝去でしたから、その面での影響は少ないと思われれます。俊治先生と共に小羊学園を創立され、多くの支援者との心のつながりを築いてくださった明子先生を天にお送りすることは、目に見えないところで、とても大きな寂しさを感じております。

山浦ご夫妻の残されたものは、小羊学園だけにとどまらず、重い障がいをもち支援を必要とする子どもたち（成人した者も含めて）を中心して、そこに集められた人たちを通して、ゆるしあい、助け合う人の輪ではなかったかと思えます。その意味で、創立者の思いを継承することは、私たち職員だけでは到底できないことなのだと思うのです。どうぞ宜しく願います。

研究発表会より

小羊学園児童寮における
在宅児童への支援のあり方

小羊学園児童寮・学齢児支援チーム

今年度もこの時期に行われました法人内施設の職員による研究発表会（二月二十四日、小羊デイケアホームにて開催）から一題の要旨をご紹介します。

小羊学園児童寮四〇年の経過

小羊学園児童寮は、一九六六年五月に開園した小羊学園の最初の施設です。

当時は、障がいのある重い子どもたちは、就学猶予、就学免除ということで、学校教育が受けられないことが多く、通所施設も少なく、既存の入所施設も介護度の高い子どもたちを受け入れるゆとりのない時代でした。そのような時代に、障がいのある子どもたちの養育に限界を感じているご両親（ご家族）のニードに答えることが、最初の小羊学園の使命であり、開園の目的でした。最初は定員三〇名、二年後に増築をして定員六〇名の子どもたちをお預かりしました。限られた職員数、限られた環境の中で精一杯対応しましたが、障がいのある重い子どもたちは、法的に児童年齢を過ぎる一八歳になっても、社会自立していくことが難しく、成人の入

所施設への移動も困難な中で、過年齢児への対応が課題となりました。

一九七三年に、おおよそ家の家が開設され、何名かがそちらへ移りました。

そして小羊学園には、また別の子どもたちが入所してきました。しかし、数年経つとまた年齢を超過する子どもたちの進路が問題となりました。一九七八年に若樹学園（定員五〇名）を開設し、再び何名かがそちらに移り、また別の子どもたちが入所してくるようになりました。この頃までは、入所施設を作るといことで、社会のニードに対応した時代でした。

転換点

一九七九年は、いわゆる「養護学校義務化」の年でした。それまでは就学免除、就学猶予とされていた子どもたちも就学できることになったのです。多くの在宅の子どもたちは、教育や訓

練のために自宅を離れて児童福祉施設に入所利用しなくてもよくなりました。し、小羊学園やおおぞらの家に在籍している子どもたちにも、当時は訪問教育というかたちでしたが、はじめて学籍が与えられることになりました。

この頃から、それまでのように多くの待機児童を抱えるということがなくなり、新たな成人施設の建設に対しても慎重になり、逆に児童施設では、入所している子どもたちが年齢を超えても在籍し続けることが全国的にも多く見られる状況となりました。小羊学園でも同様な傾向が見られました。五〇人の子どものうち二九名が過年齢児となった一九八五年四月に、施設の半分を改築して、成人施設小羊学園青年寮を併設することになりました。このときから、児童寮三〇名青年寮三〇名の併設施設として今日に至っています。

児童寮では、一九八六年四月、学齢児のうち浜松養護学校へ一〇名、西部養護学校へ四名の通学が認められました。また、一九八七年に、社会福祉法人小羊学園が設立されると、「小羊学園児童寮」と施設名称を変更しました。しかし、学校を卒業した子どもたちは次々と過年齢となり、学齢児が二名という年もありました。

一方で、入所が長期化する人たちが増えることで、居住空間としての充実をめざして、一九九一年に内部改造し、

児童寮でも一階と二階を別の生活ユニットとして区分した生活を目指しました。しかし、小羊学園全体を成人施設にしていくのか、児童施設としての機能を残すべきかについては、大きな課題として残っていました。

児童施設としての模索

山浦理事長の急逝から間もない一九九五年四月、施設長が交代したのを契機として、児童施設としての存続することを目標にして、児童期のニードに応える方法を模索してみるようになりました。一九九六年の夏、養護学校に通っている子どもたちの夏休み期間のプログラムとして、初めて「夏期デイサービス」を実施しました。その後、在宅の障がい児の生活を支えることの大きなニードを感じながら、夏休み期間の支援について、毎年実施するようになり、夏休みの支援プログラムとして定着しました。これをきっかけにして、放課後の一時預かりや、短期入所というかたちで、児童寮を利用する人たちは大きく広がりました。

数年の実践をもとにして、二〇〇五年四月、法人として浜松養護学校の近くに放課後サポートセンター「ドルチェ」を開設しました。それでもご家庭のニードには十分対応しきれない現状は、ドルチェからの実践報告でも示されているとおりです。

また、同じ年に、児童寮では浜松養護学校高等部への送迎（通学支援）をはじめました。それまでは車で片道一時間以上かかる浜松養護学校については、高等部進学をあきらめてきていましたが、通う場所のある生活を確保するためには、移動支援は必須の課題となります。

利用者へのアンケート

小羊学園児童寮にとって、在宅の子どもたちへの支援は、避けて通れない役割となってきました。しかし、入所施設として、これらのニーズにどのように応えていくことがよいのか、今一度考えてみる必要があると感じていました。また、自分たちの実践を振り返ってみる中から、これからの小羊学園児童寮のあり方を考えるきっかけにしたいとの思いから、短期入所、日中一時支援の利用者に対してアンケートを実施しました。

昨年度、今年度、児童寮の短期入所または日中一時支援を利用した子どもたちの保護者八〇名に、郵送によりアンケートをお願いしました。回収されたのは五六通で回収率七〇%でした。子どもの年齢で見ると、就学前三名、小学校年齢四〇名、中学校年齢六名、高校年齢八名、通所施設利用者一名でした。小学校年齢の子どもたちのご家庭からの回答が回収されたうちの七〇

%強になっています。

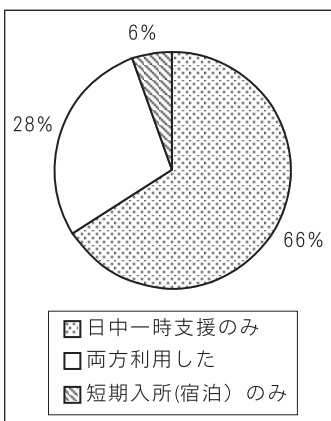
家族構成で見ると、両親世帯が多く、入所施設の利用に比べると、一般的な家庭の子どもたちが利用していることが分かります。

きょうだいの有無では、きょうだいのいる家庭が八七%であり、一人っ子の家庭では、利用が少ないことが伺えます。

利用したサービス別では、日中一時支援が五〇、短期入所（宿泊）は一六でした。うち宿泊のみの利用は三例でした。児童年齢（特に、小学年齢）で両親がそろっている子どもたちの場合は、宿泊よりも日中預かりの要望が多いということが分かります。しかし、宿泊受け入れについては、施設の都合で利用を制限していることも覚えておかなければならないと思います。

次に利用頻度としては、日中一時支援では、毎週利用、毎月利用が三〇名、年に数回（夏休みなどのみの利用者など）が一八名でした。逆に宿泊の希望は、必要なときに利用できればよいと

▼利用したサービス

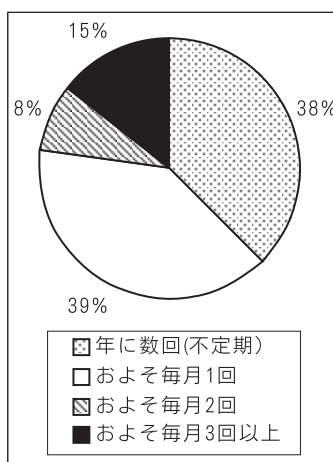
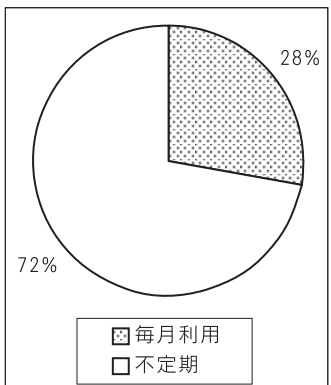


いう人の方が多くなっています。これについても希望者数が多く、毎月利用調整をしていることを念頭においておく必要があります。

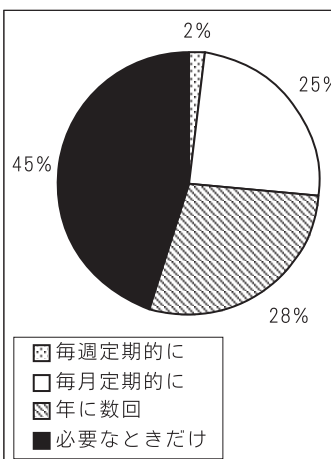
これに対して、利用希望の項目からは、日中一時支援については、夏休み等の長期休暇の要望が大きく、続いて週末等の学校の休みのときとなっています。児童保育についてはドルチェなど、ここ数年いくつかの受け入れ先が増えていることもあり、比較すると少ないことがわかりました。

短期入所（宿泊）については、年に数回とか必要ときに受け入れてくれるという希望が多いことがわか

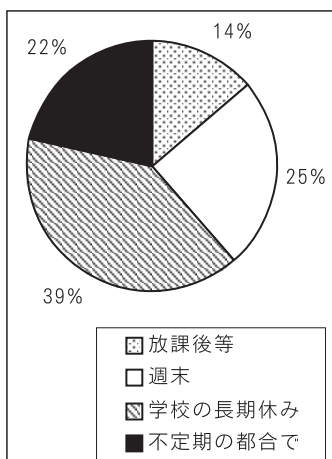
▼実際の利用頻度（日中一時支援）



▲実際の利用頻度（短期入所）



▼利用希望（短期入所）



▼利用希望（日中一時支援）

りました。定期的に利用したい人の多くは、いざというときのために、あるいは将来のために体験させたいという希望があるのではないかと伺えます。

いつから利用したかという項目では、年数が多いほど多くなっていることから、一度利用すると、繰り返し利用するようになっていく傾向にあることが分かります。

どこで日中一時支援等のサービスを知ったかという項目では、他の親からの情報が大きな役割を果たしているこ

とが分かります。行政等からの紹介よりも、情報としての影響力の大きいことが感じられます。

在宅支援の効果

アンケートの結果と記述回答の欄の記載内容から、在宅サービスの利用には、一言でいうと、生活のリズムの確保が期待されているのではないかと考えられます。これには大きくは三つあって、一つ目は、子どもたちの生活のリズムが崩れることへの対応です。夏休み等の希望が多いことなどは、この面が強いと考えます。

二つ目は、親の生活のリズムが崩れるときの対応です。週末に仕事があるとか、他に避けられない予定が入るとか、親自身の生活のリズムが整えられないときへの対応が求められていると考えられます。

三つ目は、それらのことが起こるまでに予め備えをしておきたいというニーズです。

現状の問題点

同じようにアンケートから教えらるる現状の課題としては、①利用希望に十分に応じられない。必要なときに利用できないことがある。②職員が入れ替わりであることもあり、保護者との情報交換の面で期待に十分に

られていない。③お預かりすること以上の効果(療育的な内容など)への期待に応じられない。④住居地によっては、アクセスの面で不便である。大まかには以上のように集約できると思いました。

これからの方向性

入所施設は子どもたちにとって決して本来の生活の場ではありませんが、いざというときには丸抱えで支援することもできる機能をもっています。今回のアンケートだけでこれからのあり方についてすべて決められる訳ではありませんが、量的なニーズ、質的なニーズにどこまで応えていくことがよいのかということを考えていかなければならないと感じました。

子どもたち自身は、年齢によって親や家族、地域に求めるものが移り変わっていきます。子どもたちのニーズを保護者からの要望から知ることもできませんが、子どもたち自身のニーズと保護者や地域社会の期待に違いのあることも考えられます。

小羊学園としてどのように対応していくべきなのか、日々出会う子どもたちの現われからも注意深く受け取っていかねばならないと感じています。



支える会だより

4月に稲松理事長による講演会開催

いまだ不安定な障害者自立支援法のゆくえ、地元浜松市の政令指定都市への移行など、激動の時代に、小羊学園の移転改築を含め、これからの小羊学園は何をめざしてどのような事業展開をしようとしているのか、稲松理事長から直接話を聞きます。

日時：2007年4月21日(土) 午後2時～午後4時
場所：日本キリスト教団遠州教会 1階ホール
(浜松市紺屋町 301-15 電話 053-453-4590)

演題：「小羊学園がめざすもの」
～浜松の子どもと知的障害のある人の福祉を考える～

2006年度 小羊学園を支える会 寄付金報告

12月	352件	4,264,207円
1月	53件	648,000円
2月	38件	2,564,751円
(累計)	784件	13,972,959円

皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

小羊学園改築計画にご協力ください

(口座名義)「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店 (普通) 040005
静岡銀行細江支店 (普通) 043483

問い合わせ先

〒431-1304 浜松市細江町中川 7440-1 小羊学園
電話 053-437-0826

つばさ静岡・看護師募集

昨年度静岡市にオープンしたばかりの重症心身障害児施設「つばさ静岡」では、看護師が欠員のため困っています。心身に重い障がいのある人たちの命にふれるとき、きつと大切な何かに気づくことができると思います。私たちと一緒に働いてみませんか。どなたかお心当たりのある方もご一報くださると嬉しいです。

連絡先 つばさ静岡

(静岡市葵区城北一七)
電話 (〇五四) 二四九一二八三〇
担当：羽山(事務長)

編集後記

一週間前、この後記に「山浦明子先生のご病状が思わしくありません。どうぞお祈りください。」と書いたのですが、原稿の一部を差し替えることになってしまいました。納骨式で「小林牧師の「故人はここ(お墓)におられるのではないのです。すでに天にいらるのです。…」というお話を聞きながら、最近よく耳にする「千の風になって」という歌を思い出しておりました。きっと明子先生も春の風になって私たちに明日へ向かって生きる力を届けてくださっているのでしょう。これからも与えられた課題を受けとめて、一歩ずつ前進したいと思います。(I)